

P-421 B群溶連菌保菌妊婦における新生児感染症の検討

名古屋市立城北病院

長谷川浩司, 丹羽咲江, 三輪美佐, 水野昌彦, 梶浦詳二

【目的】B群溶連菌(以下GBS)保菌妊婦においては一般的に重篤な新生児感染症が発生するといわれ、近年その予防に分娩時経母体的抗生剤投与が推奨されている。今回我々は、平成10年1月～平成11年12月の2年間で当科通院中の妊婦に対して妊娠中に膈分泌物細菌培養検査を実施し、GBS保菌者における新生児感染症の頻度ならびにその重症度を調査したので報告する。なお、今回の新生児感染は血液培養陽性例とした。【方法】平成10年1月～平成11年12月の2年間に於ける妊娠中の膈分泌物細菌培養でGBS保菌者については膈洗浄のみとし、分娩時には経母体的抗生剤投与はしなかった。新生児に関しては出生後注意深く経過を観察し、感染が疑われた場合血液培養およびAPRscoreの経時的変化をチェックした。【成績】1.2年間に於ける膈分泌物細菌培養検査を実施したのは1365例であり、そのうちGBS保菌者は201例(14.7%)であった。2.新生児感染症は8例であったが、そのうちGBSを起炎菌とするものは5例(62.5%)であった。すべてNICU管理を受け予後不良例は1例もなかった。【結論】今回の調査でGBS保菌妊婦において新生児感染例を早発型を含め、数例に認めたが、発症後の適切な処置により重症化することなく管理できた。分娩時の予防的経母体的抗生剤投与は症例に応じて施行すればよいと考えられるが、施行しなかった場合にも慎重な新生児管理が必要である。

P-422 頸管縫縮術の周術期における頸管内 Enterococcus spp. 感染防止対策の導入の有効性に関する検討

山形県立河北病院

齋藤真紀, 木原香織, 平山寿雄, 小宮雄一, 小田隆晴

【目的】近年、Cephem系抗生剤に耐性菌の多い Enterococcus spp. (E) の分離率が増加している。我々は頸管縫縮術(CC)後のEによる絨毛羊膜炎(CAM)を報告し、その感染防止対策を導入しているが、今回はCCの周術期のE感染防止対策導入前後の手術成績と児の予後について比較検討した。【方法】過去14年間のCCを施行した288例を対象とし、Eに対する感染防止対策導入前の平成5年までの121例(A期)と導入後の平成6年以降の167例(B期)について、早産率、健常児獲得率、CAM発症等につき比較検討した。CC前後に頸管内細菌培養、炎症マーカー検査を施行し、術前のE検出例に対しA期は治療せず、B期は膈洗浄と抗生剤で加療し、菌の消失を待ってCCを行った。術後はA期はat randomにCephem系抗生剤を使用した。B期はEに感受性のある抗生剤を使用した。【成績】流早産率、健常児獲得率はA期で18.2%, 93.4%, B期で15.6%, 98.8%で、B期で有意に高率の健常児が得られた($P<0.05$)。術前の頸管内E検出例の早産率はA期で75%とB期の12.5%に比し有意に($P<0.05$)に高率で、術後のE検出率もA期は27.3%と、B期の3.6%に比し有意に($P<0.001$)高率であった。A期の術後のE陽性例35例のうち14例が流早産に至り、このうち12例がCAMと診断された。B期ではE陽性例は6例認められたが、1例が36週で早産となったがCAM所見は認められなかった。【結論】CCの周術期にはCephem系抗生剤に耐性株の多いEに注目し積極的に加療することが、流早産やCAMを防止し、高率の健常児が得られることが判明した。

P-423 ヒト正常妊娠および病理学的絨毛膜羊膜炎症例の胎盤、卵膜における mature Adrenomedullin のC末端アミド化の意義福岡大¹, 同病態機能系総合研究室²牧野康男¹, 柴田和彦², 牧野郁子¹, 瓦林達比古¹

【目的】Adrenomedullin (AM) は強力な降圧作用を有するペプチドであり、AMはC末端のアミド化によりその活性を有するとされている。我々はすでに妊娠中毒症症例の臍帯動脈と卵膜において、AMのpeptideが有意に高値を示すことを報告したが、病理学的絨毛膜羊膜炎における胎盤、卵膜でのmature AM peptideに関してはいまだ不明であり、本病態におけるAMの関与について検討した。【方法】1997年3月から1999年9月までに当院で分娩した病理学的絨毛膜羊膜炎(A群)10例と正常妊娠群(B群)10例を対象とした。絨毛膜羊膜炎(CAM)は病理学的に診断された。当院倫理委員会の承認のもとに患者より同意を得た上で、経陰分娩または帝王切開時に両群より胎盤、卵膜を採取した。各組織におけるmature AMおよびtotal AMのpeptideについてはradioimmunoassay法で測定し、mature AM/total AM比で両群の比較検討をおこなった。Student's t検定並びに χ^2 検定よりp値 <0.05 を有意とした。【成績】1)母体年齢、初産婦数はA群対B群で各々、 31.3 ± 4.3 対 34.3 ± 4.3 歳、1例対4例で差は認められなかったが、分娩週数は 31.6 ± 6.0 対 37.2 ± 0.4 週で差が認められた($p<0.01$)。2) mature AM/total AM比はA群の卵膜で有意に減少していたが($39.97\pm 6.12\%$ 対 $9.55\pm 9.04\%$, p値 <0.01)、total AM peptideは両群で差は見られなかった。3)全例(20例)におけるC-reactive protein濃度とmature AMの濃度(fmol/mg protein)には、負の相関関係が認められた($r=-0.576, p<0.01$)。【結論】病理学的絨毛膜羊膜炎においてはimmature AMのC末端のアミド化の抑制が認められ、CAM発症時、子宮胎盤血流量が減少している可能性が示唆された。